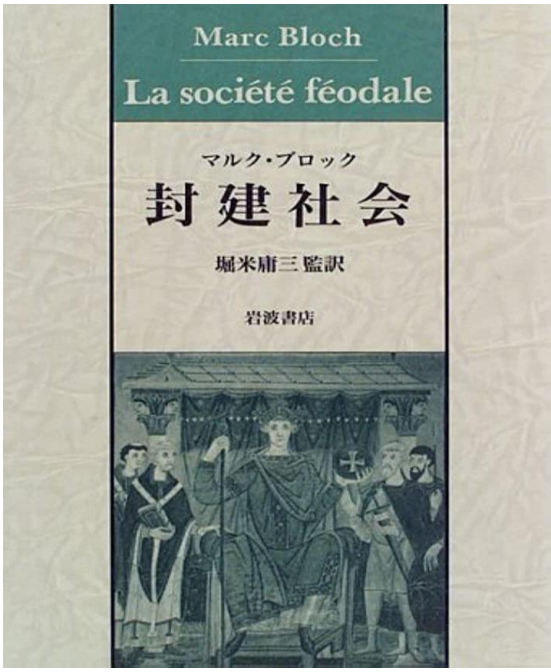
マルク・ブロック　封建社会
堀米陽三　訳　岩波書店　1995



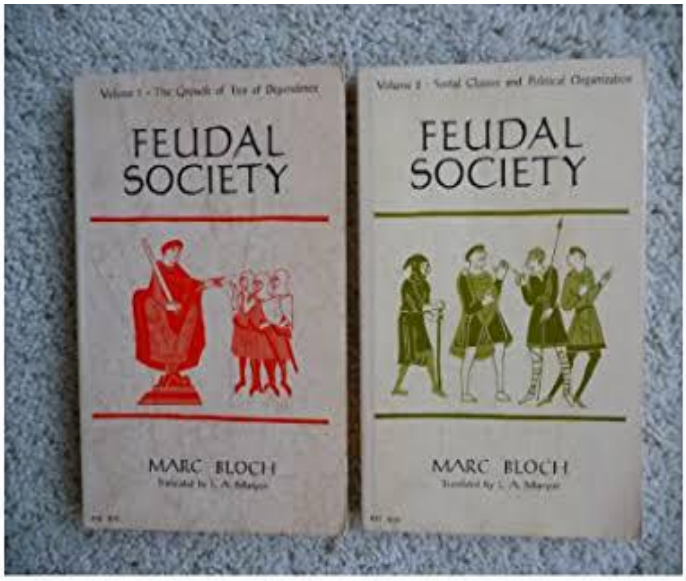
英語版

Marc Bloch said that his goal in writing *Feudal Society* was to go beyond the technical study a medievalist would typically write and ‘dismantle a social structure.’ In this outstanding and monumental work, which has introduced generations of students and historians to the feudal period, Bloch treats feudalism as living, breathing force in Western Europe from the ninth to the thirteenth century. At its heart lies a magisterial account of relations of lord and vassal, and the origins of the nature of the fief, brought to life through compelling accounts of the nobility, knighthood and

chivalry, family relations, political and legal institutions, and the church. For Bloch history was a process of constant movement and evolution and he describes throughout the slow process by which feudal societies turned into what would become nation states. A tour de force of historical writing, *Feudal Society* is essential reading for anyone interested in both Western Europe's past and present.

With a new foreword by Geoffrey Koziol

マルク・ブロッホは、『封建社会』を書くにあたって、中世の研究



★★★★★

者が通常書くような技術的な研究を超えて、「社会構造を解体する」ことを目標としたという。何世代もの学生や歴史家に封建時代を紹介したこの傑出した記念碑的著作で、ブロッホは、9 世

紀から 13 世紀にかけての西ヨーロッパにおける封建制を生きた力として扱っている。その中心は、領主と家臣の関係、領地の性質の起源に関する壮大な説明であり、貴族、騎士団、騎士道、家族関係、政治・法律制度、教会に関する説得力のある説明を通じて、生き生きとしたものに仕上がっている。ブロッホにとって歴史は絶え間ない運動と進化の過程であり、封建社会が後の国民国家へと変化していく緩やかな過程を終始一貫して描いている。本書は、西ヨーロッパの過去と現在に関心を持つ人にとって、必読の書である。

ヨーロッパ、中国、日本の封建制に関する歴史研究の傑作です。ヨーロッパ各地の封建制の第一段階の始まりから第二段階の終わりまでの、封建的精神の詳細、社会の解剖学、土地所有、階級、エリートと庶民の思想と言語の歴史、そして宗教など、控えめな知恵のナゲットがある。

この素晴らしい中世社会史は、全 2 巻の翻訳版を持っていました。引っ越しで 1 巻を紛失。その代わりとして、この本を購入し

ました（2 巻が 1 冊になっています）。残念ながら、私の目は昔とは違っています。だから、この代表作を再読するのは大変だ)Re.封建社会。マルク・ブロッホの偉大な仕事に対する現代の批判は、現代の愚行である。どんな歴史的作品でも、現在の「基準」で判断するのは、あまりにも独善的だ。書かれた当時、これは 500 年以上にわたる西ヨーロッパの社会的・政治的発展に関する最高の大衆的研究であった。単に王とその行いを列挙したものではない。常に微妙に変化していた時代の生活に対する 20 世紀半ばの社会（ist）的な視点を持っている。カロリング朝崩壊の激動から黒死病による社会の大転換まで、『封建社会』はすべてのページで知識の深さと息づかいが伝わってくる。この本を原書で読むために、私はほとんどフランス語を学ぶことになった。学問の粋を極めた人による名著である。西洋社会の基礎に興味がある人は、この作品を読まなければならない。

西洋中世について高度な概説書

　非常に分厚い本である。ところがまったくエッセイのように楽に読み進めることが出来る。

西洋中世社会について、当時まだ法制史が主流だった時代に、ひとつの文明について包括的な考察を行った、もっとも野心的な社会史の試みといえる。

異民族の侵入から生産活動の変化から血族や人間同士のコミュニケーション、宗教、思潮、法制史、軍事史等々あらゆる文化システムの要素を網羅し、それらが、中世的状況を構成している様相を解説している。

概説書として、見事に出来上がっている。

またフィールドワークをかなりした人らしく自然科学的な平易な文体で全然読みにくさがない。斜め読みも可能である。

ただ概説書なので、ヒントは得られても、それぞれのテーマについて深い知識は得られない。当然だが。読者は本書を元に自分なりに考えて知識を深めていくことが出来る。ひとつの文化システムあるいは集団の史的研究についての方法論が得られる。高校・大学の授業で使うとちょうどいい。

歴史学社会科学を志す人に非常にプラスがあるのではないか。経済人の愛読書としてよく、塩野ななみ氏や司馬遼太郎氏の著書が挙げられるが、このくらいのレベルの本を読んだほうが良いと感じる。

電子化をして宣伝をしたら版元は儲けることが出来るだろう。

この本の重要性は、およそ歴史学を志す人ならば、すでに当然知っておられる可能性が大いにあります。だから、そのような方々に対してではなく、「今日、授業で先生からこの本がすごい、すごいって言われたけど、どの辺がどうすごいの？読んだことないし分からないんだけど。」というような方に向けて、この本の「すごさ」を、三人の歴史家の見解を引くことで、とりあえず示したいと思います。

一人目。ブロックの同僚で盟友、16 世紀文化史の泰斗リュシアン・フェーブル。

【「人類の文化」叢書に『封建社会』の分厚い二巻が続けざまに出たとき、勝負は決定的に勝ちだった。偉大なフランス人歴史家の誕生したことを世界中が知っていた。否、偉大なヨーロッパ人歴史家、というほうが当たっている。・・・彼は、封建社会の変遷の叙述にあたってフランスの文書記録とデータだけで満足するような人間ではなかった。彼は、このような領域では国境は何も意味せず、イル・ド・フランスの荘園領主制とだいたい同じものがライン沿岸地方に見られるが反対にラングドック地方にはそれが見られない・・・さらにシャンパーニュの村の土地制度はとどのつまりザクセンの村の土地制度であり、ブルターニュやラングドックの村のそれではないこと、そしてこの意味するところは重大であることを知っていた。・・・我々は、マルク・ブロックが比類ない科学的装備をいかに辛抱強く身につけていったか、すでに見た［※フランス語・ドイツ語・英語・ラテン語に加え、ロ

シア語、フランドル語、スカンジナヴィア語、古ドイツ語、古ザクセン語をじゅうぶん習得し、あらゆる古文書・論文を読み込むと同時に、各地を歩き回りさまざまな農業技術などの実態を観察すると同時に、地理学・心理学・民俗学、農学などの高度な知識を身につけたこと]。道具（＝それらの言語や知識）は親方の手の内で完全であることが明らかになった。こうして、我々の精神に深い痕跡を残した二巻の偉大な書物が誕生したのである。】（『歴史のための闘い』（長谷川輝男訳）より）

二人目。アナール第三世代の碩学、中世史家ジョルジュ・デュビー。

【私にとって決定的だったのは、一九三九年から一九四〇年にかけての『封建社会』二巻の刊行である。まず、タイトルからして衝撃的であった。私はこの題を、一種の宣言のように受け取った。社会史は経済史の単なる付属ではなく、古い社会をそれ自体として研究することが正当であり、実り多く、かつ必要なことだと断言しているかのように感じたのである。私はこの大著にとびついた。・・・『封建社会』は、私の書き方にまで影響を与えたのであった。今日そのなかの数ページを読み返してみると、その若さ、無尽蔵の豊かさ、果敢さに驚かされる。今日でもなおわれわれの研究を刺激し、われわれを前進させてくれるものがそこには見つかる。たとえば、出版当時は奇抜に思われたであろうが、十二世紀の戦士の行動をよりよく把握するには、彼らを魅了した娯楽文学や、行動規範を提供していた武勲詩や騎士道

物語の証言を利用すべきであるという意見がそうだ。・・・歴史学の初学者に一冊だけ本を推薦しなくてはならないとしたら、それは『封建社会』であろう。そこに含まれたきわめて大胆な提言と、提出されている未解決の諸問題とによって、われわれが進んだ以上に遠くまで前進することを可能にしてくれるにちがいない。この本を読んだ後、私の決意は固まった。同じ道をとってみようと思ったのである。】（『歴史は続く』（松村剛訳）より）

　三人目。日本におけるアナール学派紹介者の一人で、近代フランス史がご専門だった二宮宏之先生。

　【実をいいますと、『封建社会』で扱っているテーマには中世史研究のかなめの部分がいろいろ含まれていて・・・個々の論点を問題にすると、ブロックの説に対する批判や異論は少なくありません。また、全体の構成についても・・・ぼく自身異を立てたいところが多々あります。しかし、ぼくがこの書物から学びたいのは、ある時代のある社会を捉えようとするときのアプローチのしかたで、ブロックの方法が唯一のものだというつもりはもちろんありませんが、独特な視点から切ってみせてくれた、ある意味でたいへん挑発的な作品であると思います。ブロックのあと、中世史研究は日々進展し、ブロックの研究も補うべきところは欠落を埋めることがそれなりにできるようになってきていると思いますが、ブロックが『封建社会』で

試みた方法はいまなお新鮮で、古典であると同時に前衛的な作品として生き続けていると言ってよいでしょう。】（『マルク・ブロックを読む』より）

　ここまでの引用の結果、『封建社会』という本の持つ「すごさ」の一端が、なんとなくでも分かっていただけたかも知れません。いまでも新しく、何らかのヒントを与えてくれる、とにかく恐るべき本なのです。日本を代表する西洋史学者の競演と言うべき豪華な翻訳者陣による翻訳も、格調高くみごとです（誰がどこを翻訳されたのか明記されていないので気になります）。

　これほど豊かな内容ですから、通読するのはなかなか骨が折れるという方は、場合によっては、自分のテーマ、あるいは関係するキー・タームを「索引」で調べて、その部分だけを拾い読んでみても、それなりに得るものがあろうと思います。だいたいのテーマ・用語は何らかの形で載っているのではないでしょうか（ちなみに、本書の「索引」の充実ぶりは圧倒的です）。

手にとって読んでみる価値は、ぜったいにある本でしょう。

　以下、参考までに目次を記載（１巻、２巻、とありますがそれは原著の区分であり、本書は原著の１巻+２巻を一冊にまとめたものです）。

序章　本書の目指すところ

第１巻　依存関係の形成

第１部　環境

第１篇　最後の外民族侵入

　第１章　イスラム教徒とハンガリー人

　第２章　ノルマン人

　第３章　外民族侵入の若干の帰結と教訓

第２篇　生活条件と心的状況

　第１章　物的条件と経済の調子

　第２章　感じ、考える、そのしかた

　第３章　集団の記憶

　第４章　封建時代第二期における知的復興

　第５章　法の基礎

第２部　人と人との絆

第１篇　血の絆

　第１章　血族の連帯性

　第２章　血縁の絆の特質と変遷

第２篇　家臣制と知行

第１章　家臣の臣従礼

第２章　知行

第３章　ヨーロッパの展望

第４章　知行はいかにして家臣の家産となったか

第５章　複数の主君を持つ家臣

第６章　家臣と主君

第７章　家臣制の逆説

第３篇　下級の社会層における依存関係

第１章　領主所領

第２章　隷属と自由

第３章　領主制の形態変化

第２巻　諸階層と人間の支配

まえがき

第１篇　諸階層

第１章　事実上の身分としての貴族

第２章　貴族の生活

第３章　騎士身分

第４章　事実上の貴族から法律上の貴族への変化

第５章　貴族身分内部における階層区分

第６章　聖職身分と職業上の諸階層

第２篇　人間の支配

第１章　裁判

第２章　伝統的諸権力　諸王国と帝国

第３章　領域君候領から城主支配権へ

第４章　無秩序と無秩序に対する戦い

第５章　国家再建への歩み　各民族固有の発展

第３篇　社会類型としての封建制とその影響

第１章　社会類型としての封建制

第２章　ヨーロッパ封建制の延長

「あとがき」（二宮宏之）

参考文献

封建社会　みすず書店　1973

　封建制度は、9 世紀より 13 世紀に至る西欧社会における一つの生命ある力であった。親縁関係のような、あるいは封土を媒介とする領主と家士関係のような、こうした封建的構造の核にあり、それに固有の色調を与えた人間の人間への従属の紐帯は、いかに形成され、いかなる性格を有したであろうか。これが第一巻の主題である。

　そして“良き歴史家とは伝説の人食い鬼に似ている”というブロックは、社会構造のダイナミックな展開を考察するなかにも、貪欲に人間の姿をみつめ、みごとな歴史叙述をなしている。

　ブロックがえがこうとしたのは、封建制の組織図ではなくむしろ一つの時代の解剖図である。

　第二巻では、貴族・騎士・聖職者・農奴など専業とする職分あるいは権力と威信の度によってわかたれた諸階級、およびその階層秩序を維持した統治の様相をヴィヴィドにえがく。ブロックは、あまたの武勲詩・トゥルバドゥール・騎士道物語を引いて騎士と貴族の日常生活や感情を再現し、法律文書と神学文献によって封建制の機能と精神を解読し、また社学会の手法をかりて歴史の深層に秘められた中世民衆の意識をも探求する。

著者略歴（「BOOK 著者紹介情報」より）

ブロック,マルク

1886 年、リヨンに生れる。エコール・ノルマルを終えて、モンペリエ、アミアンのリセの教授となる。第一次大戦に従軍。1919-36 年ストラスブール大学の中世史教授を勤め、ついで 1937 年ソルボンヌ大学の経済史の教授に迎えられる。別に 1929 年に、リュシアン・ルフェーヴルとともに『社会経済史年報』を創刊する。1939 年第二次大戦に従軍、1940 年フランス降服の後、レジスタンス運動に参加し、1944 年 6 月 16 日リヨン近郊にて、ナチの兇弾に倒れた

訳者

新村/猛

1905 年生。1930 年京都大学文学部卒業。名古屋大学名誉教授。1992 年没

森岡/敬一郎

1922 年生。1947 年慶應義塾大学文学部卒業。現在慶應義塾大学名誉教授、創価大学名誉教授

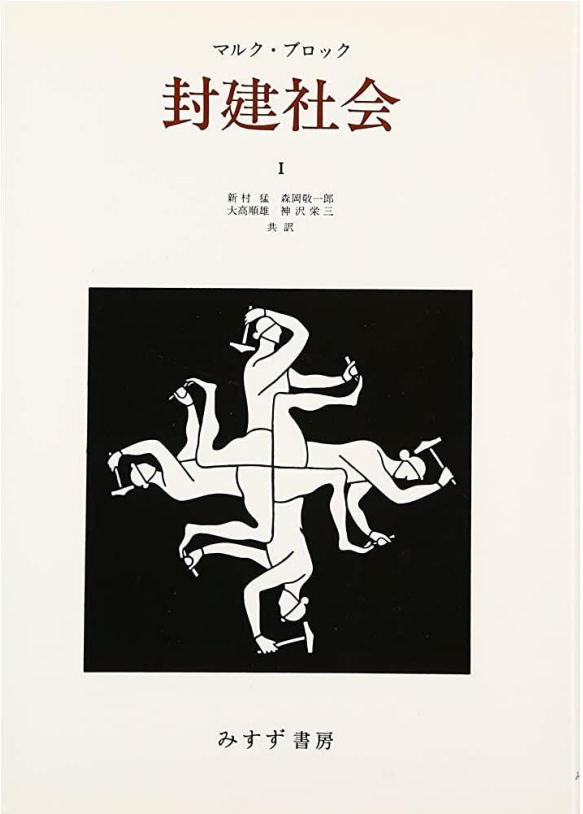
大高/順雄

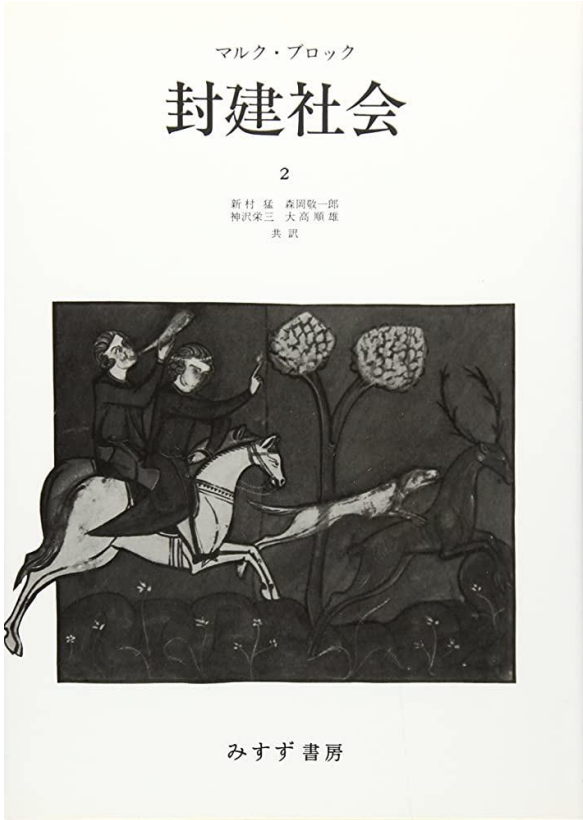
1931 年生。1954 年東京大学文学部卒業。現在大阪大学名誉教授、関西外国語大学教授、大手前大学教授

神沢/栄三

1930 年生。1959 年東京大学大学院修了。名古屋大学名誉教授。1998 年没

(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)





マルク・ブロックを読む

内容説明

『封建社会』『王の奇跡』などの著書で知られ，L. フェーヴルとともに雑誌『アナール』を創刊し，現代歴史学に革命を起こしたマルク・ブロック．その波瀾に満ちた生涯と三つの主著，学問史における位置づけなどについて，アナール学派の日本への最初の紹介者の一人であり，フランス史の碩学である著者が，わかりやすく解説する．（解説＝林田伸一）

■内容紹介

本書は，1998 年 10 月に行われた岩波市民セミナーでのレクチャーをもとに 2005 年 3 月に刊行された岩波セミナーブックスを文庫化したものです．前半の第二講までは，ブロックの生涯の軌跡をたどり，第三講・第四講では代表的な三つの作品『王の奇跡』『フランス農村史の基本性格』『封建社会』を具体的にとりあげ，ブロックの歴史の捉え方の特徴を読み解いていきます．最後の第五講では，その遺書を紐解きながら，ユダヤ系フランス人という歴史の重荷を背負いながら，ナチ占領下のフランスに，一人のフランス共和国市民として生きた歴史家ブロックの生きざまに迫ります．

■著者からのメッセージ

マルク・ブロックの名は，歴史家仲間では広く知られており，ブロックを知らねばもぐりだと言ってもよいほどなのですが，論壇の常連として活躍したり，ジャーナリズムに華々しく登場したりしていたというのではありませんから，専門外の方にはそう知られている名前ではないかもしれません．

事典風にひとことで申すならば，ブロックは 20 世紀のフランス歴史学を代表する歴史家であって，近代歴史学とは区別された意味での現代歴史学の誕生に大きく貢献し，世界的に影響を及ぼした歴史家と言うことができるでしょう．ただここで気をつけておきたいのは，一般の歴史家であれば，人名事典の記載でも，まず研究者としての経歴や主要業績が紹介され，偉い学者だったということが書かれてお終いになるのがふつうなのですが，ブロックの場合には，研究上の業績はもちろん大きなものとして記されますけれども，同時に，現代という激動の時代を誠実に生きたその生涯の軌跡が記されるのがならわしとなっていることです．

なにが特記されるかということについては，のちにかれの生涯をやや詳しくお話しする予定ですのでここでは触れませんが，マルク・ブロックという人は傑出した歴史家であると同時に，単にすぐれた学者というだけではなくて，時代と正面から向かいあい真摯に生きたひとりの知識人——というかむしろひとりの市民——してのその生涯が，人びとの心を打ったのでした．

（本書「第一講」より）

目次

第一講　時代に立ち向かうブロック
　一　ブロックとの出会い
　二　過去の重荷
　三　歴史家ブロック
　四　試煉練のとき
第二講　学問史のなかのブロック
　一　新しい学問の胎動
　二　『アナール』誌創刊
　三　三位一体——ベール・フェーヴル・ブロック
　四　『封建社会』の構想へ
第三講　作品の仕組みを読む
　一　三つの主著　①『王の奇跡』
　二　三つの主著　②『フランス農村史の基本性格』
第四講　作品の仕組みを読む（つづき）
　一　三つの主著　③『封建社会』
　二　歴史家の仕事（メチエ）——『歴史のための弁明』
第五講　生きられた歴史

　注
　あとがき
　解説　　林田　伸一

関連地図
略年譜
図版出典一覧
参考文献
主要著作

著者略歴

二宮宏之（にのみや　ひろゆき）
1932—2006 年．東京大学文学部西洋史学科卒業．フランス社会史専攻．東京外国語大学，電気通信大学，フェリス女学院大学などで教鞭をとる．東京外国語大学・フェリス女学院大学名誉教授．著書に『全体を見る眼と歴史家たち』『歴史学再考』『フランス　アンシアン・レジーム論』，訳書に G・ルフェーヴル『革命的群衆』，R・マンドルー『民衆本の世界』（共訳），J・ルゴフほか『歴史・文化・表象』（編訳）など．『二宮宏之著作集』（全5巻，岩波書店）がある．

歴史のための弁明

歴史家は何を目指し，どのような精神によってこれを達成してゆくのか．このレジスタンスに倒れた歴史家の深く透徹した省察を，親密な語り口で伝えたあまりにも有名な著作．厳密な校訂による原著新版に練達の新訳！

内容説明

本書は、第二次世界大戦にレジスタンスに斃れたマルク・ブロックのあまりにも有名な遺著。「パパ、だから歴史が何の役に立つのか説明してよ」とのわが子の問いに応えてブロックは、歴史学への論難をもっとも高い鞍部で受け止め、歴史家が何を目指し、どのような精神でこれを遂行するかを、あたかも練達の職人の親方がその手の内を明かすように諄々と説いてゆく。この名著はまるで昨日書かれたかのごとくに清新で、深く透徹した省察によって人文諸科学のすべての学徒に開かれたものとなっている。今回、ブロックの長男が遺稿に立ち戻り厳密な校訂を施し、面目を一新した本文により新訳、新版とした。

目次

第１章　歴史、人間、時間
第２章　歴史的観察
第３章　批判
第４章　歴史的分析
第５章　（無題）

著者等紹介

ブロック，マルク［ブロック，マルク］［Ｂｌｏｃｈ，Ｍａｒｃ］
１８８６‐１９４４。２０世紀のフランス歴史学を代表する歴史家。現代歴史学の誕生に大きく貢献し、その影響はあまねく世界に及んだ。時代と正面から向きあい真摯に生きた一人の知識人であり続け、第二次世界大戦中にレジスタンスに斃れた。リュシアン・ルフェーヴルと「アナール」誌を創刊、主著に『フランス農村史の基本性格』『封建社会』『王の奇跡』などがある

松村剛［マツムラタケシ］
１９６０年生まれ。東京大学大学院博士課程中退、パリ第四大学文学博士。中世フランス文献学を専攻。東京大学大学院助教授
※書籍に掲載されている著者及び編者、訳者、監修者、イラストレーターなどの紹介情報です。